



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1986
発行所
財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 電話(0797)31-3452

なぜ神は人となられたのか

1 「聖霊によりて、おとめマリヤより御からだを受け、人となり給えり。」

まもなく唱える信仰宣言のなかで、これらの言葉を繰り返しますが、そのときひびきまします。(…)

私たちは毎日御託身(受肉)の秘義を告白します。しかし、クリスマス之夜にはその秘義がふたたび教会の偉大な(今日)となるのです。典礼は、この秘義を思いださせるだけでなく、現存させます。今起こりつつあるものとするのです。

測り知れないほど深い神の秘義です。神御自身、測り知れない秘義なのです。御父と御子と聖霊が神性においては一、ペルソナにおいては三つというの、はかり知れない秘義であります。

ところで、信経の言葉はまったく新しいことを示しています。他の面から見ても、はかり知れないことなのです。

「なぜ神は人となられたのか。」神が人間となる——こんなことがどうしてできるのだらうか。これこそ、幾世代、幾世紀にもわたって問い続けられてきた疑問です。大勢の人がこの問いかけをし、そして信じられず去って行きます。ときには、自分たちの精神(理性)を越えるできごとに憤慨し、異議を申し立てます。その気持はわからぬでもありません。まことに、神が御父であり御子でありあせられるなどとは思ってもよらぬこと、ましてや、その神が人となれるとは。

2 「照らしと招き」イザヤ預言者は次のように言っています。「やみに包まれた地に住むものに、光が輝いた。」(9・2) として福音史家聖ルカはこの光についてさらに詳しく説明してくれまします。「主の光栄があたりを照らし、…：彼ら(羊飼いら)は大いに恐れた。」(ルカ2・9)

照らしと招き



そして、われら人類のため、またわれらの救いのために、神が人となられたことを信じています。われら人類のためとは、すなわち、私たちが愛する心から、という意味なのです。先に引用した信経のあの部分を唱えるとき、私たちはベトレヘムでの羊飼いたちのようにひびきまします。羊飼いたちは託身の秘義の燦然たる輝きの真中にいることに気づいたのでした。人間の暗い歴史を明るく照らす光の中にいる自分たちを。

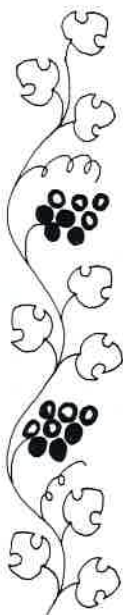
3 「招き」となって拡がります。「私たちのためにキリストがお生まれになった。きたれ、我ら拝まん」

羊飼いたちは託身の最初の目撃者となりました。マリアとヨセフの仲間になったのです。主の御降誕は第一に羊飼いらへの証言につながりました。実はこれが、教会が真夜中のミサで表わしたいことなのです。あるところでこのミサが羊飼いらのミサと呼ばれていることからそれがわかります。

「招き」となって拡がります。なぜ神は人となられたのか。われら人類のため、またわれらの救いのためでありました。(…) 全能の御方が幼子の姿で来られる。全能の御方が無力な子としておいでになる。愛で、ある無力な御方は全てを征服される。全てに意義をお与えになるのです。

と。神の秘義を前にすると、礼拝へと招かれます。啓示の光によって明らかになった秘義は、礼拝せよと招かれています。人となられた神の秘義が礼拝へと招いてくれるのです。みことばは人となられた。今夜、全教会がベトレヘムのまぐさ桶から届いた招きを受け入れます。全教会がマリアとヨセフの仲間になります。羊飼いたちに加わります。「きたれ、われら拝まん」。

教会内の一致は



キリストの真理においてのみ実現する

教会の司牧が良い結果を生むために留意しておくべきいくつかの点をあげておきましょう。

その一つは「教会内の一致」についてです。キリストの共同体が「神との親密な交わりと全人類の一致のしるしであり道具」(『教会憲章』)となるには、まず、キリストにおいて、教会内での不変の一致を実現させ、和解した教会、さらに正確に言うなら「和解した世界の初穂」とならねばなりません。ところで、一致と真理の間には本質的とも言うべきつながりがあります。ほんとうの意味での和解はキリストの真理においてのみ実現するものであって、キリストの真理の外で、あるいはキリストの真理に対抗しては実現不可能なことなのです。それだけでなく、啓示された真理は神の所有なさるものですから、教会がほしいままにすることはできません。教会の役目は啓示された真理の忠実な奉仕者となること。真理の霊が教会に与えられました。教会はこの真理の霊の助けを受けて自らの重大な使命を果たし、また、牧者に与えられた不謬の賜を守ってゆくのです。さらに神の民全体にも特別な信仰の感覚が賦与されています。それゆえ信者はもちろん、神学者などのように啓示された真理を検討し、現在の文化のなかに組み

入れるという役目を有する人々は、真理に対する責任をもつべきです。このような役目を担う人々には、このように協力が要求されています。(『人間の贖い主』19参照)

真理に對する忠実こそ、すべてのキリスト者にとってこの世で預言職(教職)を果たすための条件です。真理は倫理の尺度であります。選択した事柄とその動機が倫理的に良いと言えらるには、つまり認められるためには、それらが客観的に善と言えらるものと合っていなければなりません。過ちを犯した人々を理解し尊重するには、その人々が犯した過ちを正確

に評価できなければならぬのです。他人の確信を尊重するとは、自らの確信を放棄することではありません。

真理と愛

「真理を自覚する」すなわち救いをもたらず真理の伝達者であることの自覚こそ、教会の黎明期からの経験が教えるように、教会共同体の宣教活動にとって最も大切な事柄です。今日新たに、信仰を植付け作業を始めることこそ急を要する仕事であります。(先進国と称される国でも)強力かつ広範に、この「真理を自覚すること」が特に必要なのです。成人の要理教育を体系的、徹底的かつきめ細かに進めなければなりません。真理の伝達者であるキリスト者が真理のゆたかな遺産に気づき、キリスト教の本質の忠実な証人たるべき自

分を自覚するために。同時に、キリストの真理の本当の意味を、人々とくに現代の人々に理解してもらうため、愛と一つになった真理」として宣言し、かつ生活に生かすようにしなければなりません。「親切と真理が出会い、正義と平和が接吻する」(詩篇84:11)と云うとおり。

現代、真理を主張することは人々の平和共存の邪魔になると考えられています。それは歴史的理由でもあります。真理は相対的な基礎の上には成り立たないかのように考えられています。しかし、実は、イデオロギーがたしかに人々を分裂に追いやるのに反して、キリストの真理は、兄弟愛へと導く愛のうちに表現されることを要求しているのです。(一九八五・四・十二)

なぜ悪い天使がいるのか

天使の創造 ②

1 霊的に完璧な本性をもつ天使たちは、初めからそのすばらしい知性で真理を知り、そして、人間よりも完全に知った善を愛するよう召されています。愛するとは自由意志の行ないですから、天使にとっても自由とは、彼らの知っている「善すなわち神に従うか逆らうかのいずれかを選べる」ということになります。ここで、すでに人間について申し上げたことを繰り返さなければなりません。

せん。神は自由意志をそなえたものを造りましたが、それは自由であってはじめて実現できる真の愛をこの世界に実現させようとお考えになったからです。そこで神は、御自分に似せて造った被造物が、「愛である」神(ヨハネ①4・16)と最高度に似たものとなることできるようになさいました。自由意志をもつ純粋な霊を造りになったわけですから、当然、神は天使が罪を犯しうること



説教・講話・書簡等の抄訳

を御存じでした。しかし、神の摂理は永遠の知恵であり愛でありますから、純粹な霊が犯した類なく大きな罪からも、すべての被造物にとって決定的な善をひきだしてくださったのです。

2 事実、啓示がはっきり教えるとおおり、純粹な霊には良い天使と悪い天使がいます。神がそのように分けてお造りになったのはありません。天使は霊的な本性をもつゆえ当然のこと、自由に選択できたことが原因です。それは天使が自ら選んだ結果でした。ところで天使が選択するとうとき、それは人間の場合同様に根本的な選択を意味します。善を見きわめる直観力と洞察力を備えた知性を与えられていたから、天使がひとたび何かを選択すると、もはややり直しはきかないのです。従って、天使が受けた試験(テスト)は倫理的なものであったと言わねばなりません。それは何よりも神御自身に関する決定的な試験でした。天使は人間よりはるかに直接的かつ本質的に神を知ることができ、人間よりも先に神の本性にあずかることを許された存在でしたから。

根本的に取返しつかぬ決定

3 天使たちの場合、決定的な選択は何よりも神御自身、すなわち第一にして至高の善なる神をうけ入れるか拒否するかを決めることでした。しかも、人間が自由意志で選択する場合にくらべて、はるかに本質的に直接的であったのです。天使は神について、人間よりもはるかに

に完全な知識をもっていました。五官の介在によって制限を受けることのない知性の力で、天使は無限に完全な御方、第一の真理、最高の善である神を、その深みまで見る事ができたのです。このようなすばらしい知性をもつ天使に、神は御自分の神性の神秘を示し、恩寵によって、神の無限の栄光に与るものとさないました。霊的本性をそなえた天使は神の呼びかけに応じて超自然の高みへ上り、人間よりはるかに以前に「神の本性にあずかる者」ペトロ②①・④参照、父と子と聖霊の神の内奥の生命に与るもの、三つのペルソナの交わりの中に愛であらせられるヨハネ①④・16)神と親しく交わるもの、とされたのです。神は純粹な霊すべてに対し、人間よりも先に、もつと広範囲にわたる永遠の愛の交わりに加わることをお許しになったわけ

5 完全な知性を授け、神について熟知しているはずの天使が、神に対してこのような反抗、叛逆を行なうとは、一体どのように理解すればいいのでしょうか。天使を、取り返しのつかない神への叛逆へと駆りたてたものは何だったのか。根深い嫌悪の情が愚行となって現われたにすぎないのだろうか。神父や神学者たちは、天使が「盲目」になったのだ、とためらいなく述べています。本性としてあまりにも完全であったため、神の至高性を無視するまでになり、おとなしく神の支配に服することができなくなりました。一言で言えば、「仕えたくない」(エレミア2・20)、造られた世界で神の片腕となつて神の国を建設する仕事には、絶対に加わりたくない、と宣言したわけですね。叛逆の霊であるサタンは神の王国ならぬ自らの王国を求めて立ちあがり、創造主に対する最初の「敵対者」、摂理への対抗者、愛にあふれた神の知恵への敵となりました。サタンのこの叛逆と罪、また私たちが人間の叛逆と罪のことを考えると、聖書の伝える賢明な言葉にうなずかざるを得ません。「高慢には、滅びがある」(トビア4・13)(七・二十三)

4 明晰な知性によって神に関する真理を熟知していた天使たちは、その選択の結果、善と悪との二つのグループに分かれました。よい天使は、啓示の光を受けた知性には知ることのできる、至高・絶対の善である神を選び取りました。神を選んだとは、自由意志の内的な力、つまり愛をすべて發揮して神の側に立ったということです。神は霊的な存在の決定的な目的となったのです。他方、神が全体的かつ決定的な善そのものであらせられることを知りつつ、神に背を向ける天使もいました。この天使の選択は、啓示された神の秘義、天使を三位一体の神そのもの、および愛により、神との永遠の友情

ヨハネ・パウロ二世 教皇様の声

年間購読者募集中 (1月~12月)

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかりやすい日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

■教会でまとめて、お申込みの場合
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当番名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご請求ください。

財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎0797-31-3452

今月のおすすめ

信徒の神学と霊性 (定価四〇〇円 一、二〇〇円)
神の朋友 エスクリバー著 (一六〇〇円 一、三〇〇円)
知識の香 エスクリバー著 (二八〇〇円 一、三〇〇円)

無原罪の御宿り

「罪が増したところには、それ以上の恩寵があふれるばかりのものとなった」(ローマ5・20)(…)

ローマ人への手紙の中のこの言葉は、何よりも無原罪の御宿りの秘義について語っています。

実際、この秘義には、人類に示された神のあわれみが、最も美しい形であらわれています。

まさしく、一人の女性エバの心の中には罪があふれ、もう一人の女性マリアの心にはそれ以上に恩寵があふれました。マリアを通して人類にくだった恩寵は、私たちの先祖によつてもたらされた損害よりも、はるかに豊かでおびただしいものです。他の誰よりもマリアには、罪に打ち勝つ恩寵の勝利と、創世記(3・15参照)にある「地獄の蛇の頭をふみ砕く、女のすえ」という預言の成就が認められます。(…)

「罪が増したところには、それ以上の恩寵があふれるようになった」紀元二千年を迎えようとする現代にあっても、同じように罪がはびこ

つています。無原罪の処女と心をあわせて、「恩寵の満ちあふれる」状態がくるよう思い切つて希望しましょう。

贖いと十字架の力と、キリストの復活が、この世と世界の外から来るいかなる悪よりも強いことが示されますように。(…)

私たちが教会のように、救いの摂理の秘跡、つまり「道具」となりたいものです。お仕えしたいのです。

ですから、「主のはしめ」に目を注ぎ、より深くキリストについて学びたいと思います。また教会について、人間についての知識を深め、今以上に分別ある仕方でも奉仕できるようにしたいのです。(…)

汚れなき教会の御母と共に、「神の偉大なわざ」を称えます。「エルサレムの光栄、イスラエルの喜び、新しい民のほまれ」。

ローマ教会が聖母を「ローマの救い」と称えるこの古いパシリカで、「神が私たちになされたすべてのこと」について感謝し、教会と世界のために、代々にあわれみを乞い求めましょう。(一九八五・十二・八)

不変の教え

主は近い!

託身の秘義は

新しいいけにえの始まり

1 「主は近い。(フィリッピ4:5) クリスマスに先立つ本日の典礼にあるこの言葉を使って、待降節は、教会が特別な注意をもって、ベトレヘムのあの夜においてになるはずの方を見守るときです。毎夕の祈りのマニフィカトに添えられる、待降節のいわゆる大交誦は、教会の期待をこめたまなざしを物語っています。そして本日の典礼で、ふたたびそれを繰り返します、「主は近い」と。(…)

2 人類史上の待降節は、大づめを迎えようとしています。(…)ヘブライ人への手紙の朗読に耳を傾けましょう。神の御独り子は語られます。「見よ、私は来た；あなたはいけにえも供え物も望まれず、ただ私のために体を準備された。…神よ、私はあなたの御旨を行なうために来る。(ヘブライ10・5〜7)」

こうして、人間のもとへの神の訪れは、託身の秘義の形をとりました。神は、永遠からこの秘義を用意し、そしていま実現なきだったので。御父は御子を送られ、御子は使命を帯びておられます。聖霊の働きによって、御子はナザレトの処女の胎内で人となられました。「みことばは肉体となった。(ヨハネ1・14) みことばとは、永遠に、愛し愛される御

子のことです。愛とは、御父と御子の意向が一致していることを意味します。御父の意志と、御子の意志は、お二方にあつては同じ一つのもので、この一致の実りが、人格としての愛であらせられる聖霊です。そして、人格としての愛の交わりの結果が託身の秘義となったのです。「私のために体が準備された」。主は、近い。

信仰の従順

3 御父は、愛である聖霊の働きによって、御子のため「人間の体を準備された」。

託身の秘義は、言わば(神の)愛の「あふれ出」です。聖霊が、ナザレトの処女マリアの上にくだつたのです。「聖霊があなたにくんだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから、生まれる子は聖なるお方で、神の子と言われます。(ルカ1・35)」

聖霊の神的な力は、まずマリアの心の中で働きます。こうして託身の秘義の泉は、マリアの信仰となりました。信仰による従順であります。「私は主のはしためです。あなたのことはの通りになりますように。(ルカ1・38) 本日の福音で語られ

るように、聖母のご訪問を受けたエリザベトは、何よりもマリアの信仰を称えます。「ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は。(ルカ1・45)」

お告げをうけた時、マリアは信仰から来る従順によって、「なれかし」を宣したのです。それは決定的な瞬間でした。託身の秘義は、神的存在と同時に人間的な秘義でもありません。事実、肉体をおとりになつたお方は、神のみことば(神の御子)なのです。さらに、おとりになつたのは、人間の身体でありました。

ナザレトの処女が「なれかし」(おことばの通りになりますように)と告げたその時、御子は御父に向かってこう言われたかもしれせん、「私のために、体が用意されました。神の降臨は、人間の働きによって、もたらされます。信仰による従順によつて。」

4 本日の典礼は、御子の永遠の従順——「見よ、私はあなたの御旨を行なうために来た」について、また、御子の地上での母となるべく選ばれた処女の従順について、語っているだけではありません。託身の秘義が実現した地についても語って来ています。ミカヤの預言にはベトレヘムとい

う地名が見られます。ベトレヘムこそは、永遠の御子が人間となつて初めてご出現になるはずの地なのです。神の御ひとり子、人の子、マリアの子として。

預言者は語ります。「そして、エフラタの地ベトレヘムよ、おまえはユダの家族のうちでもっとも小さい者だが、イスラエルを治める者が、おまえから生まれねばならぬ、その出は、ずっと以前、昔の日々にさかのぼる。(ミカヤ5・1(…)) 預言者はさらに続けます。「そののち、兄弟の残りの者が、イスラエルの子らのもとに立ちもどる」と。

神のひとり子が、人間として、処女からお生まれになつたことにより新しいイスラエル、新しい神の民が誕生しました。

この民は、キリストの「兄弟」、恩寵によつて、「御子における子供たち」となるべき人々です。彼らは「神の子となれる力」を授かります。使徒聖ヨハネが福音書の冒頭で述べているとおり。(ヨハネ1・12参照)

これらすべてのことが実現する地、救いの歴史の中で、何度も思い返されるであろう場所；それがエフラタの地ベトレヘムです。(…)

5 「キリストは世に入るとき言われた、『あなたはいけにえも供え物も望まれず、ただ私のために体を準備された。あなたは燔祭と罪償のいけにえを喜ばれなかつた。そこで私は、(神よ、私はあなたの御旨を行なうために来る)と言つた。』(ヘブライ10・5〜7)」

託身の秘義は新しいいけにえの始まりを意味します。それは、完全な

いけにえです。聖霊の働きによって処女の胎内に宿り、あの夜ベトレヘムでお生まれになつた御方は、永遠の司祭です。託身によつて、いけにえとしての役目を果たされたのです。「神に喜ばれる」いけにえとして。

神は、人間の内的な真実をことごとくあらわすいけにえ、意志と心によるそのいけにえを、お喜びになります。神のひとり子は、人類の歴史の中でそのようないけにえをささげるため、人間の本性と肉体をお取りになつたのです。

彼は「死に至るまで(フィリッピ2・8参照) 服従すること、申し分なくそのつとめを果たされました。この従順は、処女マリアの胎内からすでに始まっています。ベトレヘムのあの夜から：「神よ、私はあなたの御旨を行なうために来た。」

6 ベトレヘムのみどり子のもとに集うとき、そしてクリスマスの間ずっと、私たちはクリスマスのもとには神に栄光、地には善意の人々に平和あれ(ルカ2・14)と歌わずにはいられません。

そして何よりも、私たちはこのすばらしい秘義の、深奥の真理を学ぶのです。「神よ、あなたの御旨を行なうために、私は来る。」

神の御子を通して、私たちは御父の御旨を行なうことを学びます。そうです。これこそ「御子において子供」となつた人々の果たすべき使命にほかなりません。これこそ私たちキリスト信者のつとめ、人間の生活の中での、神の降臨の実りにほかならないのです。(八五・十二・二十一)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部七十円送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393